

11 藤浪 鑑教授とがんの疫学調査 (二)

林直助教授の協力と戦後の研究への寄与

青 木 國 雄

〔目的〕 藤浪 鑑教授一門による一九〇八年から一九三六年にわたる大規模ながん疫学調査を総括、その意義と戦後の我が国の疫学研究に及ぼした影響を考察する。

〔方法〕 この二十八年間に発表された十二府県の論文を基礎とした。藤浪教室では、京都、滋賀県(鈴木信義)、香川県(小山三郎)、奈良県(梶川泰造)の四地区、林直助愛知医大病理学教室では、愛知県(野村久作)、岐阜県(野村久作、吉田萬次)、静岡県(吉田萬次)、三重県(横山一角)、山梨県(片田武揚)、富山県(杉浦義信)、福井県(津田龍平)、石川県(加藤敏郎、加藤澄夫)の八地区である。前者は京都医学雑誌、後者は病理学紀要に発表された資料を用いた。

〔調査方法の概要〕 十八地区とも調査方法はほぼ同じ

で、鈴木信義の京都府の調査に準じているが、地域により一部特殊な病因調査を追加している。その内容は a. 市町村別に五〜十年間の死亡診断書を閲覧、死亡率を性、年齢別に検討、b. 癌の部位別頻度分布の検討、成績を世界各地と比較検討。c. 癌の死亡頻度と地域の、地勢、気候、住居環境、排水の良否、飲料水の質との関連、d. 住民の生活程度、食生活、嗜好、飲酒、職業とがん死亡の関連 e. 京都地区では、大学での剖検例と臨床知見との比較検討 f. 肉腫の頻度とその特性、である。

林教授は、藤浪教授門下で、藤浪教授の企画に積極的に協力した。鈴木信義は名古屋好生館病院に赴任し、野村久作の愛知県の調査を指導したよう、謝辞が述べられている。

〔調査結果の概要〕 各論文とも詳細ながん死亡の頻度分布や、町村での実地調査の詳細を掲載してある。藤浪教授は一九二九年の日本病理学会で、香川、奈良県の結果の発表に当たり、以下のごとく要約している。がん死亡頻度は地域差が大であるが、日本では、人口十萬対六〇〜九〇で、欧州各地と比べ大差はない。年齢別分布も

類似している。臓器別分布はかなり異なり、日本は胃、肝、食道が多く、女性の乳がんは少ない。がん地図を作ったが参考となろう。がん死亡率が高い地区は、居住地域が、土地平坦で海岸や大河に近く、湿潤な低地で、排水の不良の傾向があるが、絶対的な条件ではない。生活習慣では、生活水準が高く、美食を好み(魚肉食が多く)、飲酒が多い地区に、がん死亡は高い傾向にある。奈良では茶粥の習慣が胃や食道がんと関連する。更に広域に調査して傾向を確かめる必要があるとしている。一九三六年、林教授は日本病理学会で中部八県のがんの頻度分布を総括しおおね藤浪教授の発表と変わりない結果を述べ、発生要因も各地域類似しているが、一定しないものが多いが、地域で特有の要因もあると述べている。

〔考察〕 この一連の研究は当時としては世界的に優れた研究である。ただ医学統計学が未熟な時代で、がんの頻度も年齢構成で標準化されず、相互比較は正確ではない。生活習慣調査も地域単位で、要因の定量化が不十分であった。

前回、こうした研究は中断されたと記述したが、戦後

も名大と京大関係者によりしばらく続けられていた。一九五三～五五年の厚生科学研究費による癌の疫学的研究(班長緒方知三郎、疫学担当瀬木三雄)では全国の大病院の患者調査をしているが、この疫学調査内容は、藤浪一門の調査を基礎にしたと考えられ、大きな貢献があったと考えている。ただ、その後は忘れ去られたのは残念である。

(訂正…日本医史学雑誌四七(三) 五六三上四列、二〇〇一、

中川は林の誤り)

(愛知県がんセンター)